

まちの情景と建築

田中 修一

世界編

住宅1 憧れの住まい環境 イングランド・コッツウォルズ地方



ロンドンから車で1時間圏のイングランド中央部にロンドン子が憧れる潇洒な地域がある。左はシェクスピアの生地ストラトフォード・アポン・エイボンである。この小さな町には劇場が3か所もあって毎夜上演されている。ヨーロッパの川はどこも流れが緩やかなので、川面に映る住宅も落ち着いた佇まいを見せる。

これから演ずる芝居の手配りを相談しているらしい、先生と生徒の団がいる。夕方の街路でよく見かける光景だ。シェクスピアの生家は町はずれにある。おなじみ柱・梁を現しにしたハーフティンバーのデザインはチューダー朝の建築様式で、部材の節約の効果も期待して考案された。1階は石やレンガを詰め、2階は漆喰で塗り固めるデザインも多い。



一方こちらは少し南に下った町チップینگカムデンのお菓子の家のようなかわいい住宅である（と言っても面積は大きい）。石積みの壁に藁屋根の農家風の造りで、屋根は金属製の亀甲網で剝るんである。屋根の棟は藁束を重ねて、その上を金属の透かし彫りで覆う。何気なくぼかしたような作りだが、実に丁寧にコストがかかっていることが、近づくほどに驚かされる。庭の植栽の手入れの行き届いた様子などを見ても、一分の隙もない。本当のお金持ちの家とはこうしたものようだ。

この周辺にはこのほか、ポートン・オンザ・ヒル、モートン・イン・マーシュ、パイブリーなどの町が点在する。そこで感心させられるのは、こうした郊外に来てても相変わらず電柱も電線もない。すべて地中埋設なので、広告宣伝の袖看板やポール看板などを取付ける拠り所がない。目障りなのが一切ないので空が広いということだ。

